

今回のコンクール課題作品として選ばれた古井由吉の短編と小沼丹のエッセイは、これまでの審査委員会が提示した課題作と同様に難易度の高いものだった。それは言語面や複雑な文化的背景の理解だけでなく、2作それぞれ原作テキストに合った翻訳スタイルを生み出し、それを維持する努力が求められていたからである。3名の受賞者はこれらの困難にみごとな工夫と解決で対処していた。

優秀賞を受賞したリチャード・ラッツ氏とジョアンナ・デアー氏の翻訳には、優れた文学翻訳にみられる質の高さが多く示されていた。ラッツ氏の「辻」の表現は、古井の小説を照らし出す場所に対する深い感覚をつかみながら、物語全体のドラマチックな緊張感を保っていた。デアー氏による小沼丹の「梨の花」の翻訳は原作にあふれる魅力と心地よい博識を英語で表現している。二人の翻訳にはどの翻訳者にもありがちな誤訳や文体上の誤りが幾つかあるものの、両方とも感心すべき翻訳作品であった。

カトリーナ・アンダーソン氏の最優秀賞作品はほかの受賞者と同様に多くの優れた点を有しているが、一貫した正確さと巧みさで洗練された表現力が上回っており、最優秀賞として選ばれるに値するものだった。アンダーソン氏による「辻」の英訳はシンプルかつ簡明であり、古井の原作と正にぴったり合っている。

一例をあげてみよう。

He still felt the sense of rapture that had welled up when he had set foot on the road cut through the mountain. Behind him, more and more pale purple butterflies danced above the valley. Flocks of white flowers twinkled like stars amongst the dark groves. The high-pitched sound of the sea came at intervals.

(原文)

「切通しに入った時から始まった恍惚感(こうこつかん)はまだ続いていた。背後にいよいよ数を増して、薄紫の蝶(ちょう)が谷の上へ舞いかかる。暗い藪(やぶ)の中から白い星が群れて顫(ふる)える。潮の音が間を置いて甲高いように鳴る。」

これら受賞者3名が、原作の美しさと文化的背景をととも良く伝えるクリエイティブで魅力的な英語版を生み出したことを祝福する。すばらしい原作に対してみごとな出来栄となっている。彼らの翻訳を読み、それぞれが文芸翻訳家として活躍する未来を想像するのは喜びである。

スティーヴン・スナイダー